

日本人の「心」と「形」

大阪大学名誉教授 長谷川 晃

はじめに

筆者は昨年、テクノネット2020年1月号に「魏志倭人伝を読み直す—卑弥呼は縄文人の日御子」と題する論文を出版した。ここで日本固有の縄文時代に見られる母性文化が弥生後期の卑弥呼（著者の解釈で、日御子）の時代まで継承されていることを論じた。同時に日本人の持つ本音「心」と建前「形」の二重文化のうち、和（やわらぎ）を好み自然との一体感を中心とする「心」の文化は縄文時代の母性文化にその源を見ることができる話をした。これは縄文遺跡から発掘された多くの女神像、そして、埋蔵された人骨に傷がない事実に基づくものである。一方、卑弥呼（日御子、あるいは日巫女）をベースとする母性文化の証明は魏志倭人伝という歴史的文獻に基づくものである。今回は3世紀の卑弥呼（日御子、あるいは日巫女）を日本の歴史の中でさらに掘り下げて調査することから始め、「心」が日本文化の中にどのようにして伝承されるに至ったかを見ることにする。一方基本的には外来文化である「形」がどの様にして日本文化に取り入れられたかを7世紀初頭の聖徳太子による十七条憲法を見ることによって論じる。この憲法の制定にあたり、太子が仕えた女帝、推古天皇が縄文から継承した日本人の「心」をその第1条、「和（やわらぎ）を以て貴しする」の条文に明記させたかを推論する。ここで、外来文化の「形」である「法」に日本人の「心」が如何に反映されたかを観ることが出来る。さらにはこの「心」が歴代の天皇家によって継承されていることを観る。一方、仏教と儒教を基本とする「形」は聖徳太子の十七条憲法の中で初めて明文化され、政治が天皇家から分離する中で、政権を担当する武家によって継承されることになる。これが後に縄文の「心」に肉付けされ、日本武士道として再現されるに至ったと思われる。思想的には縄文人の「心」は老子の道徳教においてその価値が再認識されている。一方、「形」としての武士道は孔子の論語や礼それに太子が導入した仏教にその源を見ることができる。これらは外来文化であるが、ここに縄文から受け継いだ「心」が加わり、日本独特の「形」が生まれたと思われる。

1. 纏向遺跡、倭迹迹日百襲姫命と日御子（卑弥呼）

2009年に桜井市の纏向（まきむく）遺跡（写真1）で2800個の桃の種（写真2、桜井市埋蔵文化財センターで展示）が出土した。この種をカーボン14による年代測定をした結果、なんとこれらがAD130年から230年頃のものとなった。正に魏志倭人伝の時代である。桃は道教の供物として用いられていたことから、この場所は魏志倭人伝で「鬼道を能くし、人々を惑わす」と記述されている、卑弥呼（日御子、あるいは日巫女）の宮殿跡ではないかと



写真1 纏向遺跡



写真2 纏向遺跡で見つかった多量の桃の種
（桜井市埋蔵文化財センター）

する推論が持ち上がった。

それでは日本の歴史書と照らし合わせて、卑弥呼(日御子、あるいは日巫女)は誰と認定されるのだろうか？

宮内庁は纏向遺跡に隣接する箸墓古墳を日本書紀で表されている第7代孝霊天皇の皇女、倭迹迹日百襲姫命(やまとととひももせひめのみこと)あるいは古事記での同一人物である夜麻登母母曾毘賣(やまととももそびめ)のものだと認定している。この姫は別名単に百襲姫ともいい、巫女的な性格を持っていたとされる。日本書紀の記述では姫は三輪山に祀られている大物主神(大国主命と同一人物とも言われている)に娶られるが、大物主神は夜にしかやってこない(縄文時代から続く通い婚の流れ)その姿を見たいと姫が願ったら翌朝大物主神は櫛の中に小蛇の姿で現れた。百襲姫は驚いて叫んだら、大物主は恥じて三輪山に登ってしまった。百襲姫はこれを後悔して腰を落としたら、箸が陰部をついたために亡くなってしまふ。箸墓古墳が倭迹迹日百襲姫命の墓と認定されたのは、こうした記述が元になっている。三輪山は古来から聖地とされ、現在では三輪明神が祀られてあり、神社のお守りには十二支の巳さんが描かれている。箸墓古墳、纏向遺跡、それに三輪山は数キロメートル内に隣接して存在する。

歴史家たちが実在したと認定している天皇は第10代崇神天皇以降とされているので第7代孝霊天皇の皇女である百襲姫は神話と実在のボーダーラインにある姫である。日本書紀の第10代崇神天皇の項を読むと、天皇が百襲姫に相談し、神のお告げを伺う場面が何度も出てくる。こうした記述から崇神天皇が政治を行う上で百襲姫の神がかり的な予言に頼っていたことがうかがえる。この記述から百襲姫を卑弥呼(日御子、あるいは日巫女)に当て、崇神天皇を魏志倭人伝にある卑弥呼の弟に当てる想定が可能になる。

ここで233~297年に書かれた魏志倭人伝の卑弥呼の出るくだりを再記しておこう。

其国本亦以男子为王、住七八十年 倭国亂相攻伐曆年乃共立一女子为王 名曰卑弥呼 事鬼道能感衆 年已長大 無夫婿 有男弟 佐治国 自为王 以来少有見者 以婢千人自侍 唯有男子一人 給飲食傳辭出入居處 宮室樓觀城柵嚴設 常有人持兵守衛 等々。和訳は「其の国はもと、男子が王となっていたが、七、八十年後、倭国は乱れ、共に女性を立てて王とし、卑弥呼と呼ぶようになる。卑弥呼は鬼道を能くし、人々を感ずる。年配で、独身である。弟がいて助けて国を治める。卑弥呼を見るものはほとんどなく、千人ほどの召使いが自ずから侍っている、唯一人の男性が女王に飲食を運び、王の言葉を伝える役

をしている。宮廷は柵をめぐらし、兵が常に警護に当たっている。」

このくだりを日本書紀の百襲姫の話と照らし合わせてみると、卑弥呼を百襲姫、そして国を治めた弟を実在する百襲姫の甥、崇神天皇に当てはめると、年代的にも辻褄が合うというものだ。この説は江戸時代からあったそうだが、今回纏向遺跡で発見された多量の桃の種のカーボン14から推定される年代が魏志倭人伝の年代と一致し、また、多量の桃の種は道教の儀式につかわれたみられることから、「鬼道を能くし」とされている魏志倭人伝の記述とも合致する。これらの結果、纏向遺跡を卑弥呼の宮殿跡と認定することは容易に認められる。

しかし、この話を認めると従来邪馬台国九州説を唱えている関東の歴史学者たちは敗北する。結果、彼らは纏向遺跡からは当時の中国との交流を示すものが何一つ出土されてないではないかと反論する。これはその通りだが、私は百襲姫(卑弥呼)の死後、これらの貴重品は(箸墓)古墳に埋葬されてしまったと見る。こうして、纏向遺跡の発見は邪馬台国近畿説にも大きな利点となっている。

卑弥呼は他にも天照大神とする説もある。また、魏志倭人伝では卑弥呼の死後、国が乱れたので卑弥呼の後継者である女性壹與(とよ)が後を継いで国が治ったとされている。こうして大和国では、争いが起こると、その都度、女性の力を借りて国を収めて来たようだ。

さて、話を元に戻して日本人の「心」の問題を考えよう。縄文時代の1万年もの間、日本人は自然の恵みの中で暮らしてきた。この事実が日本人の心に大きな影響を与えたことは間違いない。縄文時代の文化は自然との共存をベースにするものである。発掘された人体像から当時は女神を崇める母性文化が中心であったことが推測されている。また、貝塚は自然の霊を敬い、自然との共存生活を現すものであることを示している。さらに埋蔵された人骨に傷がないことから、当時は人間同士の争いがなかったことが証明されている。日本の伝統とされる「和、やわらぎ」の心は縄文時代に育まれたものであることは間違いない。これは人と人の和であり、人と自然との和でもある。

しかし、縄文後期の紀元前10世紀頃に稲作が日本に入ってくる。そしてほぼ千五百年ほどの間に食糧事情は大幅に改善され人口も急増することになる。この時代を歴史家は弥生時代と呼ぶ。弥生時代に続くのが権力の集中を表す巨大な古墳が作られた古墳時代である。箸墓古墳が作られたのは古墳時代の始まりの頃だ。稲作が始まると、食糧事情は良くなるが、その反面、縄文時代には共有財産とみなされていた「土地」に価値が出てくる。結果



桜井市埋蔵文化財センターで展示されている弥生土器（左側）と縄文土器（右側）

当然のこととして「土地」の奪い合いが発生する。この結果人と人との争いが起こり、より大きな土地の所有者が政治権力を持つようになる。実際縄文時代にはなかった埋蔵骨に傷の跡が目立ち始めるのが弥生時代の特徴である。弥生時代とは稲作が始まっただけではなく、こうした新しい人間の社会構造を生み出した時代でもあるのだ。同時に縄文時代にはお祭りの道具とされていた銅鐸の銅が溶かされて武器になる。千年ほど続く争いの結果、豪族が生まれ、さらに国家が形成されるようになる。これが古墳時代に続く。

桜井市には弥生後期の遺跡だけではなく縄文遺跡もある。桜井市の埋蔵文化財センターでは同地で発掘された弥生土器と縄文土器が並べて陳列されている。

この例で分かる通り、弥生時代に入ると土器が生活用品として多量に作られた反面、縄文時代にあった装飾がなくなっている。土偶も丹念に作られた女神像から、のっぺりとした趣のない男性像（主に軍人）に換わる。これは縄文時代の「心」の時代から新しい社会組織を伴う「形」の時代への変遷を表している。稲作が普及し、食糧事情が良かった反面、生活から心が失われ始めていることを表しているように見える。

2. 日本国家建設の基盤となる縄文の「心」

一 推古天皇と聖徳太子の背景

古墳時代に入ると漢字で大和言葉を表すようになり、万葉仮名が生まれる。万葉集には縄文時代から引き継がれた自然を愛でる日本人の「心」が初めて文字として表現されるようになる。こうした流れの中で、筆者は縄文の「心」は卑弥呼らの巫女により、「神の心」として引き継がれたと考える。そして、争いが起こるたびに神がかり的な女性が出て来て国を収めて来たのだ。

飛鳥時代に入ると、仏教が伝来する。また、中国の儒教や老子の思想も入ってくる。その結果、日本人の「形」あるいは「たてまえ」が次第に形成されていく。その具体例が聖徳太子の十七条憲法である。内容は主に官吏に対する心得「形」を示したものだが、特徴的なものとして、第1条は有名な「和（やわらぎ）を以て貴しと為し」で始まる国民全体に対する戒め、第2章は仏教を奨励している点である。そして第3章以降に儒教を基本とした官吏に対する心得を説いている。ここでその第1条の原文を紹介すると、

一曰、以和爲貴、無忤爲宗。人皆有黨。亦少違者。以是、或不順君父。乍違于隣里。然上和下睦、諧於論事、則事理自通。何事不成。（Wikipediaによる和読み；一に曰く、和（やわらぎ）を以て貴しと為し、忤（さか）ふること無きを宗とせよ。人皆党（たむら）有り、また達（さと）れ

る者は少なし。或いは君父（くんぷ）に順（したがわ）ず、乍（また）隣里（りんり）に違（ちが）う。然れども、上（かみ）和（やわら）ぎ下（しも）睦（むつ）びて、事を論（あげつ）らうに諧（かな）うときは、すなわち事理おのずから通ず。何事か成らざらん。）

となっている。これは「和を以て貴しとすると」という有名な言葉から始まっている。これを「ワを以てトウトシ」と読むことが多いようだが、これは重箱読みでよくない。この文は争いの絶えない弥生時代の国民感情を縄文時代のものに戻そうとしていると見ることができる。つまり「心」を法の中に取り入れて「形」としているのだ。第3章から以降は儒教の礼を基本とする教えが入る。こうして日本人の持つ「形」あるいは建前が形成されてゆく。

聖徳太子の頃には日本は形の上ではほぼ男性社会が形成されたと見ることができる。しかし、心は縄文時代から引き継いだままのものとして残る。この頃から天皇の役割が日本人の「心」の伝承となってゆく。つまり、天皇の役割が政治から分離し、精神的な面でのリーダーとなってゆくのだ。

聖徳太子が使えた天皇は女帝、推古天皇（在位593年—628年、和風名：豊御食炊屋姫尊（とよみけかしきやひめのみこと））である。推古天皇は29代舒明天皇の皇女で、母は大臣であった蘇我稲目の女、堅塩姫である。豪族蘇我氏と天皇家の血を引く。元は敏達天皇の妃であり、天皇との間に七人もの子供をもうけたが、敏達天皇の崩御後、39歳で敏達天皇の皇太子、崇峻天皇の後を継いで推古天皇として皇位を継承する。神話時代の神功皇后を除くと初めての女帝である。その後36年間の長きにわたって天皇として立派にその役割を果たす。女帝推古は古事記の記述で最後に出てくる天皇でもある。聖徳太子が上記の十七条憲法を制定したのは推古12年（604年）であるから、推古天皇が即位して政治力が成熟した頃である。憲法制定には推古天皇の意向が強く働いたことは間違いない。和を以て尊しとするを第1条に掲げたのはこの表れであろう。「和」つまり「やわらぎ」は縄文時代から母性文化の産物として日本人に受け継がれて来た「心」の代表であり、縄文時代終了後ほぼ1500年もの間、脈々と受け継がれて来たと見ることができる。聖徳太子の数々の偉業は背後に推古天皇の女性としての考えと力があつたからこそなし得たと言えるだろう。

推古天皇の時代を世界に目を向けると中国は隋の時代、女帝の存在はない。ヨーロッパはまさに暗黒時代の最中。英国王朝はまだ存在しない。アラブではムハンマド（マホメット）が誕生した頃である。ムハンマド（570—632）が

生きたのは推古天皇在位の頃とほぼ重なるのが面白い。推古は世界的にもまさにユニークな存在であり、縄文の母性文化の継承者とも言える。

さらに重要なことは当時世界的にもまだ「国家」という概念が希薄であったにも関わらず、推古天皇の命を受けて聖徳太子が隋の皇帝に「日出ずる国の天子からと「日出處天子致書日没處天子無恙云云」の書簡を小野妹子に託したのは有名だが、これは日本が7世紀前半にすでに国家概念を持つちゃんとした独立国であったという驚くべき事実を示すものである。私はこの背景には1万年以上続いた縄文文化による日本人の心の繋がりがその背景にあったからだと思っている。強力なリーダーや国家体制だけでは「国家」は成立しないことは近隣諸国の歴史を見れば明らかである。さらに言えば、この「心」は論語という「仁」ではない。仁は「形」であり心ではない。

その後

縄文時代に誕生した日本人の「心」はその後、平安女性によって引き継がれ、平安文化として花咲く。明治維新の激動の中、西欧列国による植民地化を免れ、日本の「心」を代表する天皇を中心に新しい民主主義国家が建設できたのも、縄文の心を継承したからではないだろうか。

以前から私は日本人の本音と建前の二重構造を説明するのに建前は外来文化と論じてきた。聖徳太子が仏教や儒教の精神を持ち込んで憲法を構築したのもその例だし、武士道に取り入れられた儒教や戦後日本の建前となった米国スタイルの民主主義も同様である。しかし、どの時代においても、外来の「形」の中に縄文の心が反映されてきた。縄文時代には国家が存在せず、政治組織の必要はなかった。「心」だけがあればよかった。しかし、弥生時代に入る土地の奪い合いから、大地主が誕生し、これが豪族となり、豪族同士の争いから、次第に政治組織が確立されてゆく段階で「形」が必要となる。これに仏教や儒教などの外来文化が利用された。しかし、聖徳太子の憲法第1条で見られるように日本では縄文の「心」がその「形」に反映されている。平和憲法のも形は米国製民主主義だが、精神は縄文の「心」と言えよう。この心を伝承して来たのは天照以来の天皇家である。

米国でも「心」と「形」が議論される場面見ることができる。それはJames Stuartが映画“Smith goes to Washington”において、彼が米国議会上院で徹夜で素晴らしいスピーチをする場面だ。そこで彼は“Law and Constitution have no meaning without a heart”と言った場面があったのを記憶する。つまり、米国でも「心」があつての「形」であることが強調されることがある。



熊野本宮にある和泉式部の碑

縄文の「心」は脆弱に見えても、日本の長い歴史を通して、様々な外圧や外来文化に屈する事なく、日本らしきとしてを守り続けられてきた。これはまさに母性文化の底力である。老子はその76章で母性文化の芯の強さを論じている。ここで老子は

「人の生（う）まるるや柔弱、其の死するや堅強。萬物草木の生や柔脆（じゅうぜい）、其の死するや枯槁（ここう）。故に堅強なる者は、死の徒なり。柔弱なる者は、生の徒なり。是を以て兵強ければ則ち勝たず、木強ければ則ち折る。強大は下に處（お）り、柔弱は上に處る。」と言う。日本人の「心」は老子の言う若さの現れかもしれない。

最後に日本人の「心」をうまく表している平安女性の例を挙げておこう。当時からその心のよりどころとされていた一つに熊野権現を祀る熊野本宮がある。私の好きな和泉式部も都からはるばる熊野詣でをしていた。ところがやっと本宮にたどり着いたら、マンわるく、月のものが始まってしまった。彼女、致し方なく、「はれやらぬ身

のうきくものたなびきて月のさはりとなるぞかなしき」と歌って権現様に訴える。そしたら夢枕に権現様が現れ、「もとよりも塵にまじはる神なれば 月のさはりもなにかくるしき」と答えたという。（1343年に編纂された勅撰和歌集、「風雅集」に収録されている熊野権現の歌 第十九 神祇歌 2109）これを聞いて和泉式部は安心してお参りを済ませたとか。日本人の「心」のよりどころとしている神様は塵に交わっている世俗的な神様、自然そのものなのだ。もとより、熊野の神が泉に直接話したわけではない。このやり取りは女性、和泉式部の熊野権現そのもののイメージであろう。みんなが崇める神が塵に交わっていると世俗的な神だとする彼女の考えが出ているとみると、これまたおもしろいではないか。縄文時代に生まれた日本人の「心」はこうして神道を通じて、日本女性の中に生き続けている。

（通信 昭和32年卒 34年修士）